KITA SUMA　2023　第 48 回　北の住まい住宅設計コンペ募集要項

課題　「旅行者の家」

今年 5 月に新型コロナウィルス感染症の位置づけが変更され、久しぶりに私たちの日常生活や、まちの賑わいが戻りつつあります。海外からの旅行者の入国制限もなくなり、国内外から北海道を訪れる旅行者が増えています。

道内には、山や海、大地など四季を通じて魅力的な風景や場所があります。そして、人々が住むまちも魅力です。

具体的に場所を設定し、北海道の魅力に浸（ひた）る「旅行者の家」を設計してください。

計画条件

・北海道内の地域と敷地、住戸形式、家族構成等は自由に設定してください。

賞　金

・最優秀賞　25 万円（1 点）
・優秀賞　　5 万円（2 点）
・奨励賞　　2 万円（4 点）

締　切（厳守してください）

・2023 年 9 月 29 日㈮　持参の場合は 16：00 必着。
郵送の場合も 9 月 29 日㈮に間に合う様必着。
（なお、土・日・祝日は受付できません）

参加資格

・一般、学生等を問いません。
・北海道内居住者とします（学生・生徒は北海道内の大学等に在籍している者に限ります）。
・個人参加、グループ参加は自由です。

提　出　物

(1)　図面

設計趣旨及び設計意図を表現する図面（縮尺は自由）。

図面には、氏名、記号などを記入しないでください。

A 1（841×594）サイズ一枚、横づかい（縦づかいは無効です）。表現は自由です。

ハレパネ又はスチレンボード（厚さ 5 mm 程度）などでパネル化してください。表面の貼付材がはがれないように作成してください。

(2)　返信用ハガキ

受付番号をお知らせするために使用しますので 63 円の官製ハガキに応募者の住所・氏名を記入して提出してください（官製はがき以外は、受付できません）。

(3)　その他

・応募作品の「作品名」
・応募者氏名（フリガナ）、
所属先名（学生は、学校名・学年）、
電話番号、住所
・以上を A 4 用紙に記入し応募作品とともに提出してください。

審査委員（委員は五十音順）

委員長　米　田　浩　志
北海学園大学工学部建築学科教授

委　員　赤　坂　真一郎
㈱アカサカシンイチロウアトリエ代表取締役

委　員　小　澤　丈　夫
北海道大学大学院工学研究院教授

委　員　小　西　彦　仁
ヒココニシアーキテクチュア㈱代表取締役

委　員　佐　藤　　孝
北海道科学大学工学部名誉教授

委　員　澤　田　貞　和
㈱日本工房会長

委　員　松　田　眞　人
㈱都市設計研究所代表取締役

選考経過

①一次審査（2023年10月3日㈫～5日㈭）

一次審査通過者の受付番号は10月13日㈮頃に主催者ホームページ（http://www.do-kjk.or.jp）で発表します。

②二次審査（2023年10月30日㈪10：00～）

一次審査通過作品から10作品を選出します。

③最終審査（2023年10月30日㈪13：00～）

二次審査通過作品（10作品）から各賞（計7作品）を決定します。

最終審査は「公開審査」とし、当協会8階A会議室で行います。

入賞者発表

・2023年11月上旬

入賞者に直接通知するとともにホームページでも発表します。

北海道建築士事務所協会ホームページに掲載し公開

ホームページURL　http://www.do-kjk.or.jp

・1次審査通過作品は、協会広報誌「ひろば」（12月発行）に掲載します。

また、最優秀賞受賞の方には、同誌への寄稿をお願いしています。

応募作品の著作権等

・応募作品の著作権及び版権は、応募者のものとします。ただし、この事業の趣旨に基づいて、主催者が図書の出版や、新聞、雑誌、その他に掲載又は啓発宣伝などに利用する場合は無償で認めるものとします。

・応募作品は原則として返却しません（返却希望の場合は、事務局に相談してください）。

提出先

〒060-0806 札幌市北区北6条西6丁目2番地
設計会館　9階
一般社団法人 北海道建築士事務所協会
TEL 0111-788-7650
ホームページアドレス http://www.do-kjk.or.jp
※持参される方：平日9：00～17：00受付
但し締切日は16：00まで受付

第48回「北の住まい」住宅設計コンペ 入賞者名簿

最優秀賞（共同作品）	河村 健太郎	北海道科学大学3年
	小林 温佳	北海道科学大学3年
優秀賞	高橋 遼乃介	星槎道都大学4年
優秀賞（共同作品）	杉下 英宇	北海道科学大学3年
	奥山 颯斗	北海道科学大学3年
奨励賞（共同作品）	原田 耕太	室蘭工業大学大学院1年
	藤村 柊斗	室蘭工業大学4年
奨励賞	高橋 来未	学校法人美専学園　北海道芸術デザイン専門学校2年
奨励賞（共同作品）	奥野 柊也	堀尾浩建築設計事務所
	塩野谷 基悟	フリーランス
奨励賞（共同作品）	飯田 二千翔	北海道科学大学大学院1年
	白石 航大	㈱都市設計研究所

主　催

(一社)北海道建築士事務所協会

後　援（順不同）

北海道
(一財)北海道建築指導センター
(一社)北海道建築士会
(公社)日本建築家協会北海道支部
(一社)日本建築学会北海道支部
㈱北海道建設新聞社

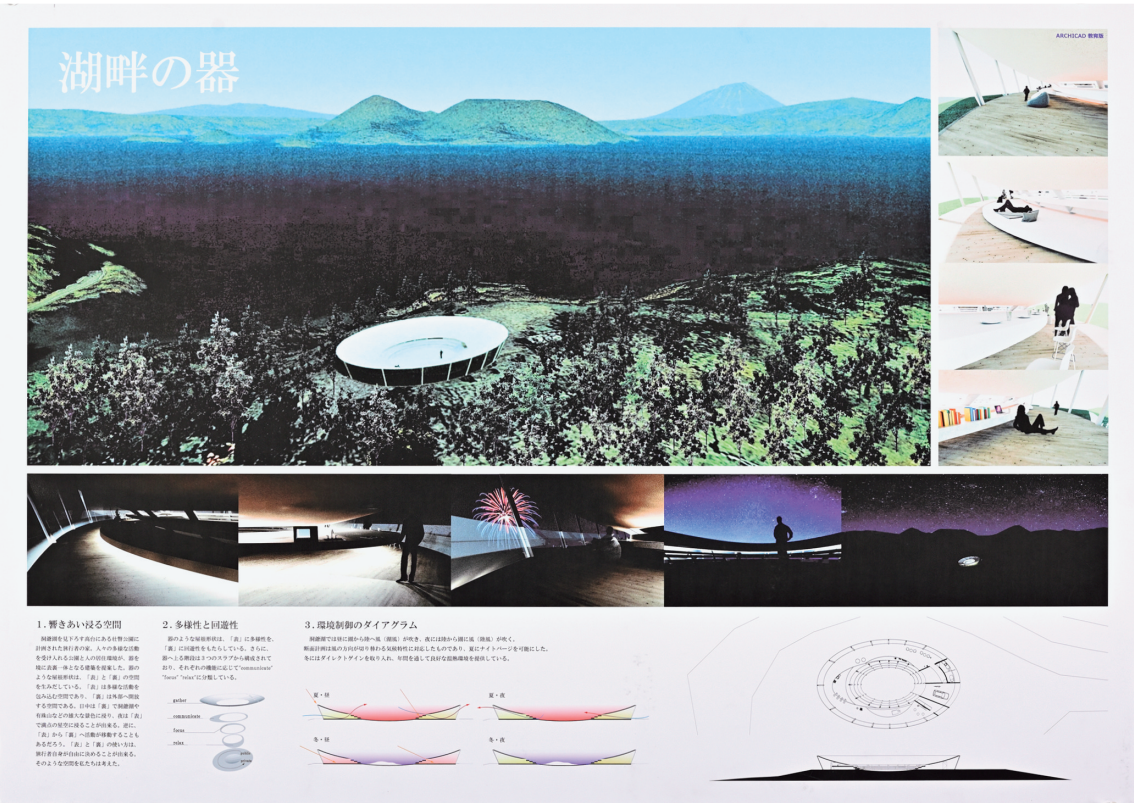
表彰式

最優秀賞

「湖畔の器」

河　村　健太郎（北海道科学大学３年）
小　林　温　佳（北海道科学大学３年）

（共同作品）



雄大な洞爺湖を見下ろす壮瞥公園に、器状の楕円曲面が置かれている様がシンプルで美しい。

楕円の中心にある中庭状空間の周囲に、外周から内側に向けた下り勾配をもつリング状のスラブを浮かべることによって、スラブ下の回遊空間と、近・中景への視界を遮断し大空に向かって開かれたスラブ上の器状空間が、ひとつの中庭を囲んでつくられている。設計者は、ここに表と裏の関係を見立てる。これは、旅人にひと時の安らぎを与えるひとつ屋根の下の居住空間と、雄大な星空を通じて感じさせられる宇宙への無限の開放空間との対比であると同時に、四季と一日の時間の流れの中で絶えず移ろい続ける木々の姿、眺望、空気、日差しを、表裏一体の関係の中に体験できる住まいの提案として諒解でき、審査員から高い評価を受け最優秀賞となった。

最後に、審査委員会では、緩やかな傾斜地を選定するなど、地面との積極的な対話のかたちを検討することによって、さらに複合的な価値をもつ住まいの可能性が開けるのではないかとの意見がだされたことを付け加えておきたい。

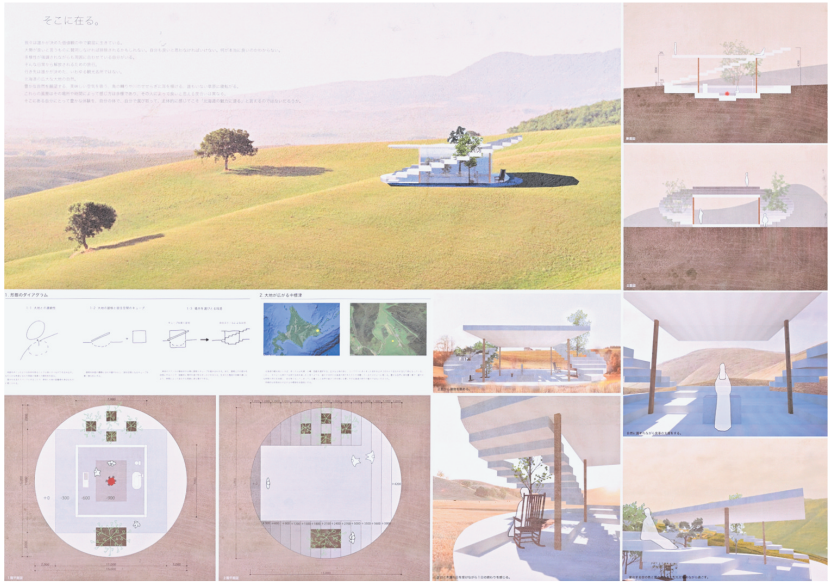
審査委員会委員　小澤　丈夫

優秀賞

「そこに在る。」

高　橋　遼乃介

星槎道都大学４年



高橋さんの設定した場所は、北海道の広大な大地を感じる、道東・中標津の牧草地である。その大地の一部が切り抜かれて、内に居る者は、グランドレベルに沿った広大なパノラマを体感する。

また、切り抜かれた円形プレートは、斜めに置かれて屋根・テラスとなり、広大な遠景領域の内に自分が置かれ、この場所に浸る。

これは、大地に対する円と正方形プランの建築であり、上昇する階段は天と地をつなぐ図式であり、実存空間である。そして、環境内に定位する居場所を求めた美しいプランの建築である。

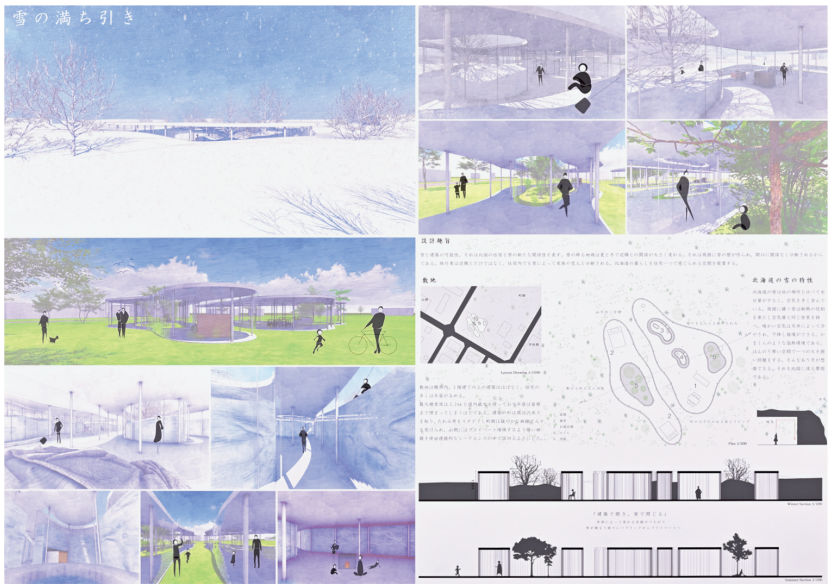
審査委員会委員　佐藤　　孝

優秀賞

「雪の満ち引き」

杉　下　英　宇（北海道科学大学３年）
奥　山　颯　斗（北海道科学大学３年）

（共同作品）



北海道幌加内町に敷地を想定したこの計画は、この地の最大積雪深度３ｍ強によりガラス張りの住居の周囲が雪の壁となり夏には見えていた各室が分断されることに着目し計画された案である。

積雪によるガラス張りの家の空間分節は、北国ならではのアイデアであり異空間を想像させる。しかしプレゼンにあるようなガラスに密着した雪の状態には室内の暖気による熱伝導により起らず十数センチ離れると考える。また屋根の積雪はどこにいったのだろうかなど、まだまだつめる要素がある。だが北国の家の新しい住まい方の提案としては魅力ある作品であるには違いなく評価された。

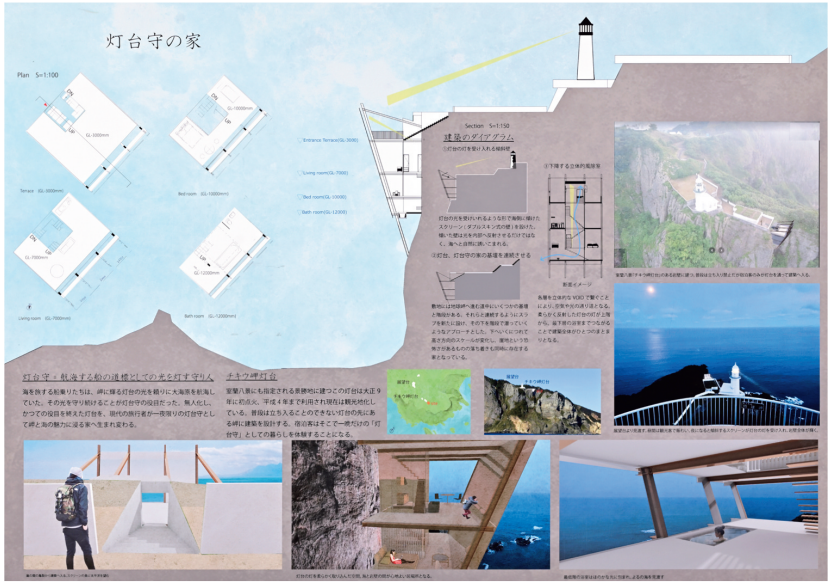
審査委員会委員　小西　彦仁

奨励賞

「灯台守の家」

原　田　耕　太（室蘭工業大学大学院１年）
藤　村　柊　斗（室蘭工業大学４年）

（共同作品）



敷地は室蘭八景に指定されている地球岬。平成４年まで使われていた灯台があり観光地となっている。宿泊客が一晩だけ灯台守をして過ごす家を提案。断崖絶壁を背に、見渡す限りの水平線を楽しみ、人目を気にせず独り占めの夜を過ごせる。建物はシンプルに鉄骨とガラスとスラブで構成されていて過ごし方と時間が自由。

人を寄せ付けない場所にあえて、癒しを設けた非日常空間。

屋上から階を下がるに従って、プライベートになり、開放感と独り占め感が特徴的である。

より軽くあたたかい宿泊空間が、絶壁に浮かぶ姿を想像するには少しデザイン不足だが、敷地の魅力を高め、旅を楽しむ個性ある時間と場所を感じる見事な作品です。

審査委員会委員　澤田　貞和

奨励賞

「赤い森の家」

高　橋　来　未

学校法人美専学園　北海道芸術デザイン専門学校２年

高橋さんは、能取湖の湿地に生息する一週間だけ赤く染まるサンゴ草（アッケシソウ）に魅せられ、この時期、この場所に浸る建築を求めた。

絶滅危惧種の能取湖アッケシソウは、湿地の乾燥による危機的な状況に追い込まれたこともあり、この作品の場所想定と建築行為のあり方に審査では疑問もあった。

しかし、大きく描かれた夕景の湖と建築のグラフィックは、美しく、審査員の眼を魅了した。ピロティや外壁の金属素材には、サンゴ草や湖の風景が映り、風圧等の水平力を保つ線材の構造など、湿地を考慮した繊細で魅力的な建築として評価された。

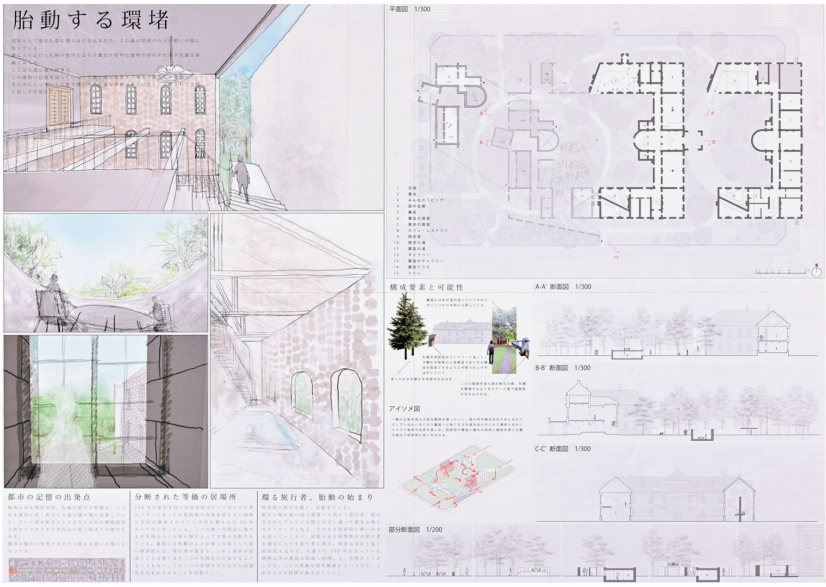
審査委員会委員　佐藤　　孝

奨励賞

「胎動する環堵」

奥　野　柊　也（堀尾浩建築設計事務所）
塩野谷　基　悟（フリーランス）

（共同作品）



この提案は大通りにある歴史的建造物の再生プロジェクトであり、おそらく個人の住宅ではなく旅行者の宿泊施設と思われます。提案の題名である「環堵」とは家を取り巻く垣根のことだそうです。大通りを取り巻く垣根なのか、垣根のような建物のことなのかわかりません。我々も知らなかったのですが、控訴院が当初はロの字型の建物であり、その後、現在の様な一文字型の建物になったのだそうです。

元々の建物の外郭を残しながら、寝室や食事空間や浴室をちりばめ、前面（東側）には半地下に埋め込まれた寝室があり、その屋根の上は屋上庭園（テラス）となっていて大通公園と一体化させようとしているようです。

元々の外郭を残しながら現在のニーズに基づいた宿泊施設としての機能を植え付けているようです。風致地区なのでかなり難しいことですが、あの場所にこのような空間が存在し、それが質の高い場所になっていたら、素晴らしい「旅行者の家」になるものと思われます。

凡そ 150 年の間に植民され、原始が一気に現代化された北海道では、本州とは異なり時間が凝縮されています。この時間を感じながら都市を味わうのも旅行のだいご味です。何も素晴らしい自然の景観だけが北海道の財産ではありません。その意味で、この作品は、我々に別の北海道というものを教えてくれています。

但し、どこまで何を残し、何を提案しているかの区分けが不明確であり、そして実現できている空間の質がどのように素晴らしいか、更に大通公園とどのように一体化しているのかのアピールがやや弱いのが残念でなりません。

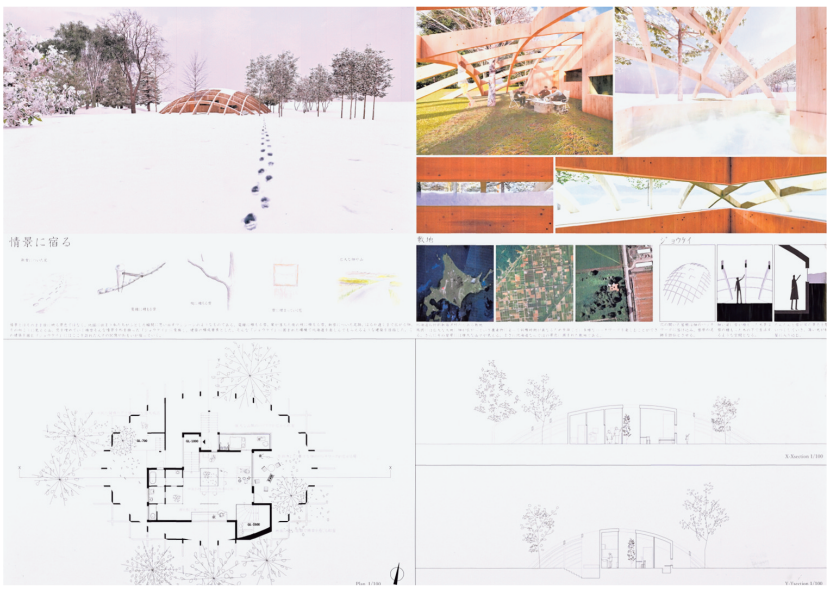
審査委員会委員　松田　眞人

奨励賞

「情景に宿る」

飯　田　二千翔（北海道科学大学大学院１年）
白　石　航　大（株式会社 都市設計研究所）

（共同作品）



農村風景を背にしたオープンな木造ドームフレームの下に、植物と共生する平屋住宅が佇んでいる。住まいとして見ると半屋外的な中間領域を囲うドームの高さや平面的な広がりのサイズ設定は秀逸で、積雪や日影などを上手く利用しながら四季を通じて様々なアクティビティを受容できる、居心地の良い案に仕上がっている。

しかしながら住宅平面や中間領域の形状が、自立しているはずのドームフレームのグリッドに支配されていることには、やや疑問を感じた。

「北の住まい」のウィークポイントである屋根の構造や性能が、ドームフレームによって担保されるのならば、その下にはグリッドルールに縛られない、もっと自由で大胆な「旅行者のため」の空間が展開できたのではなかろうか。

審査委員会委員　赤坂真一郎

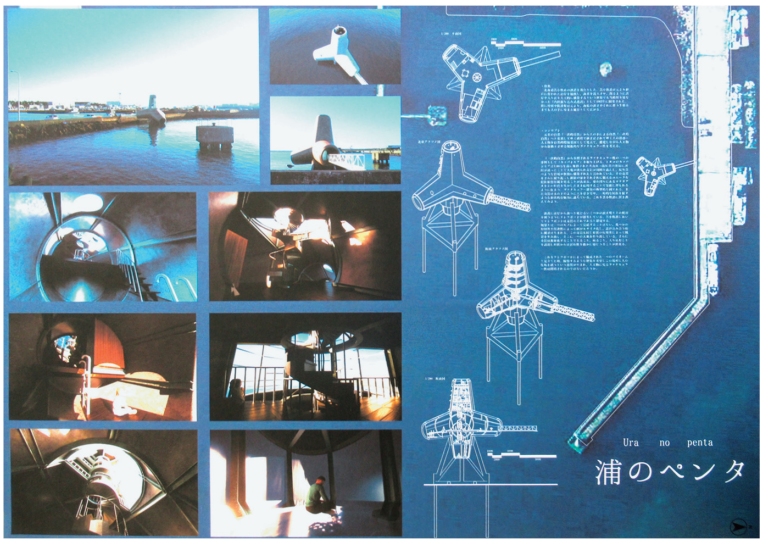
2次審査通過作品

納　谷　龍　輝

北海道科学大学４年

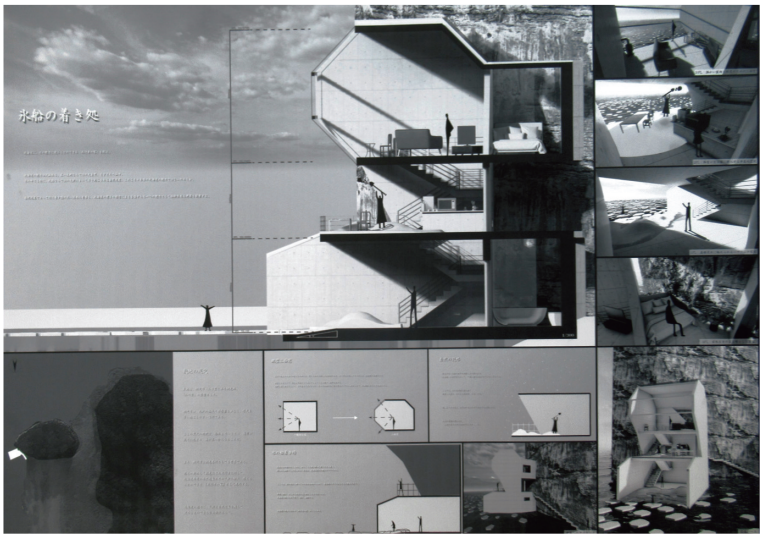
武　者　凌　平

フリーランス



鈴　木　大　喜

北海道科学大学３年



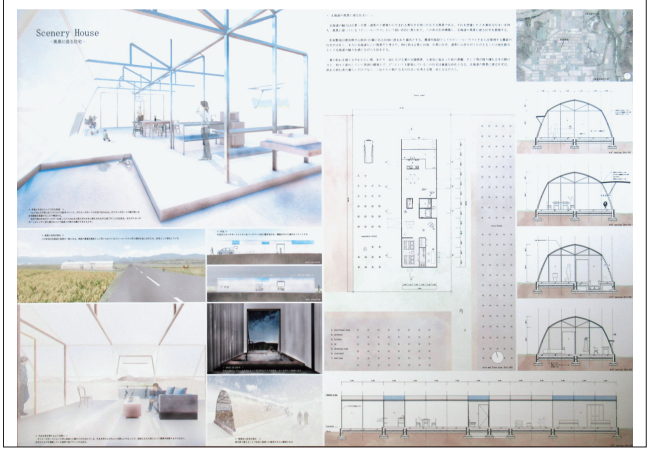
１次審査通過作品

納　谷　龍　輝

北海道科学大学４年

半　田　晃　平（北海道科学大学４年）
桐　山　凪　沙（北海道科学大学４年）

（共同作品）

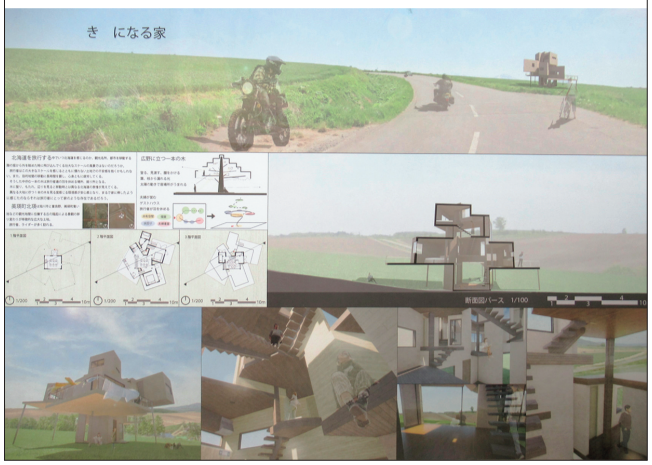


渡　辺　倫　大（北海学園大学４年）
中　岡　樹　希（北海学園大学３年）
青　山　勇　輝（北海学園大学３年）

（共同作品）

倉　本　恭　輔

室蘭工業大学４年



加　藤　丈　治（北海道建築設計監理㈱）
黒　田　啓　斗（フリーランス）

（共同作品）

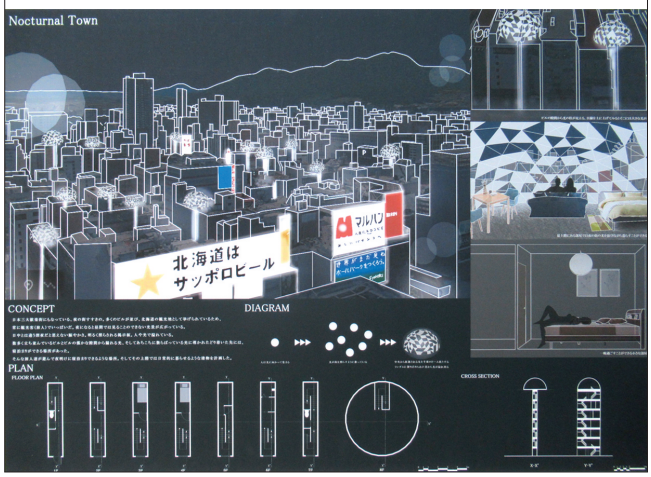
芝　田　碧　敬

北海学園大学４年

１次審査通過作品

渋　井　実　梨

学校法人美専学園　北海道芸術デザイン専門学校２年

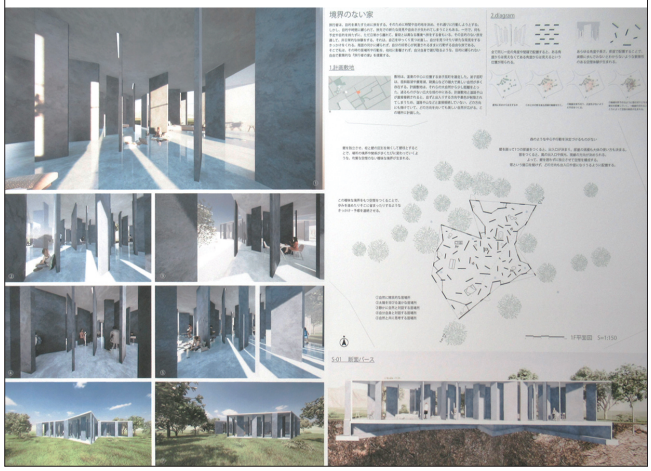


田　渕　あかり（札幌市立大学３年）
原　　さとみ（札幌市立大学３年）

（共同作品）

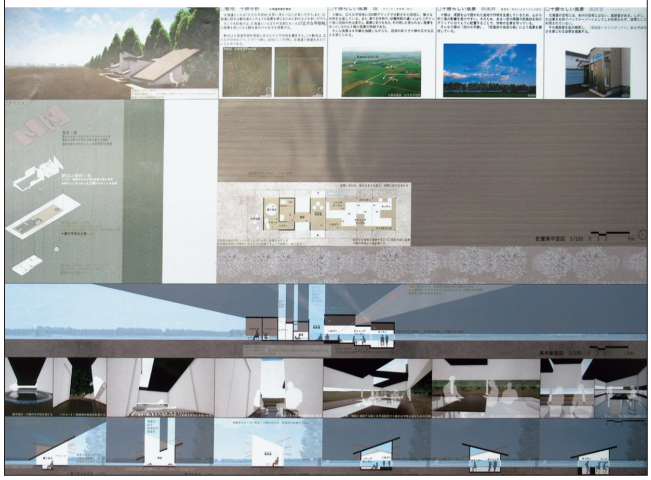
伊　賀　彩　音

北海道科学大学大学院１年



加　藤　雅　大

室蘭工業大学大学院２年



遠　藤　綾　子

学校法人美専学園　北海道芸術デザイン専門学校２年

最終審査（公開形式）

第 48 回 「北の住まい」住宅設計コンペ
総　　評

今年に入り新型コロナウイルスの感染症法上の位置づけが変更された。それに伴い徐々にかつての社会生活が取り戻されるようになってきた。そのような状況の変化によって、人々の行動が拡がり、国内外を含め旅行者も増えてきた。特に北海道は、もともと旅行者が多く訪れる環境ということもあって、旅行者数の変化が顕著に現れている。その旅行者を受け入れる北海道の宿泊環境は、さまざまなスタイルとして存在している。しかし、多様化する旅行者に必ずしも応えられているとは言えない。北海道の魅力は、人々が生活するまち、そして原生的な風景が拡がる自然環境にある。今回のコンペでは、北海道を訪れる旅行者に、その魅力を享受してもらえるよう、体験にとどまらず、浸（ひた）れる「旅行者の家」のあり方を問いかけた。かつての日常生活が戻って来た中、改めて、旅行による新たな体感性を追究する意義は大きい。

北の住まい住宅設計コンペは、1969 年にスタートした。今年 2023 年、48 回目を迎える。これまでも様々な課題と共に、北海道住宅の可能性を探求してきた。今回は、新型コロナウイルス感染症から解放されたことを契機に、改めて北海道と共にあるべき家を問うコンペであった。今年の作品応募は、 9 月 29 日に締め切った。応募総数は 42 作品であった。昨年よりも若干減少したが、ほぼ平均的な数と言える。その後、第 1 次審査は、10 月 3 日から 5 日の 3 日間で行われた。審査委員は各自 7 票を持ち作品を選出した。42 作品中 1 票でも投じられた作品を第 1 次審査作品とした。今年の通過作品は 21 作品であった。その後、第 2 次審査を 10 月 30 日の午前に行い、改めて各審査委員間で議論を重ねながら、投票によって 21 作品から 10 作品を選出した。この 10 作品はベスト 10 入賞作品となる。さらに同日午後、第 3 次審査を公開形式で行った。改めて議論を重ね、そして数回による投票によって、最優秀賞作品 1 点、優秀賞作品 2 点、奨励賞作品 4 点を決定した。

最優秀賞作品「湖畔の器」（河村・小林案）は、すり鉢状のコート空間に大きな特徴がある。このコート空間は、大自然が拡がる外部環境に対して大胆な開き方をしていた。すり鉢状のコートは、空をダイナミックに切り取り、そして新たな地平線をも想起させる風景を生み出していた。自然の中に人工性を介しながら、マクロ的な自然を体感させる空間操作は秀逸であった。そして、優秀賞作品「そこに在る。」（高橋案）は、北海道らしい平原の広がりがある中に、幾何学的なオブジェクトを配置していた。柱、スラブ、階段を単純化した基本構成は、コルビュジェのドミノシステムを彷彿させる。これらの建築要素によって自然とシームレスな関係を生み出している。このような関係は、自然と建築の間に新たな共生性を生み出すであろう。求心的でもあり、遠心的でもあるコート空間の演出は巧みであった。もう一つの優秀賞作品「雪の満ち引き」（杉下・奥山案）は、雪との関係を新たに探求した作品であった。雪の変化は多様である。雪は冬において大きな支配力を持つが、部分においては変幻自在の不定形な存在である。このような雪の特性を積極的に住宅に取り入れると北海道の冬の生活はもっと豊かになるに違いない。雪の層の美学的表現や雪の風景操作は大いに評価できる。そして、奨励賞 4 作品もそれぞれにテーマと向きあった特徴的な作品であった。

今回の北の住まい住宅設計コンペにおいても、応募作品から大いに刺激を受けることができた。この刺激は、制作者たちの建築に対する情熱と換言することができる。創造する上での情熱は、新たな建築を生み出していくための原動力になるだろう。皆さんのさらなるご活躍を期待したい。

設計競技審査委員長　米田　浩志

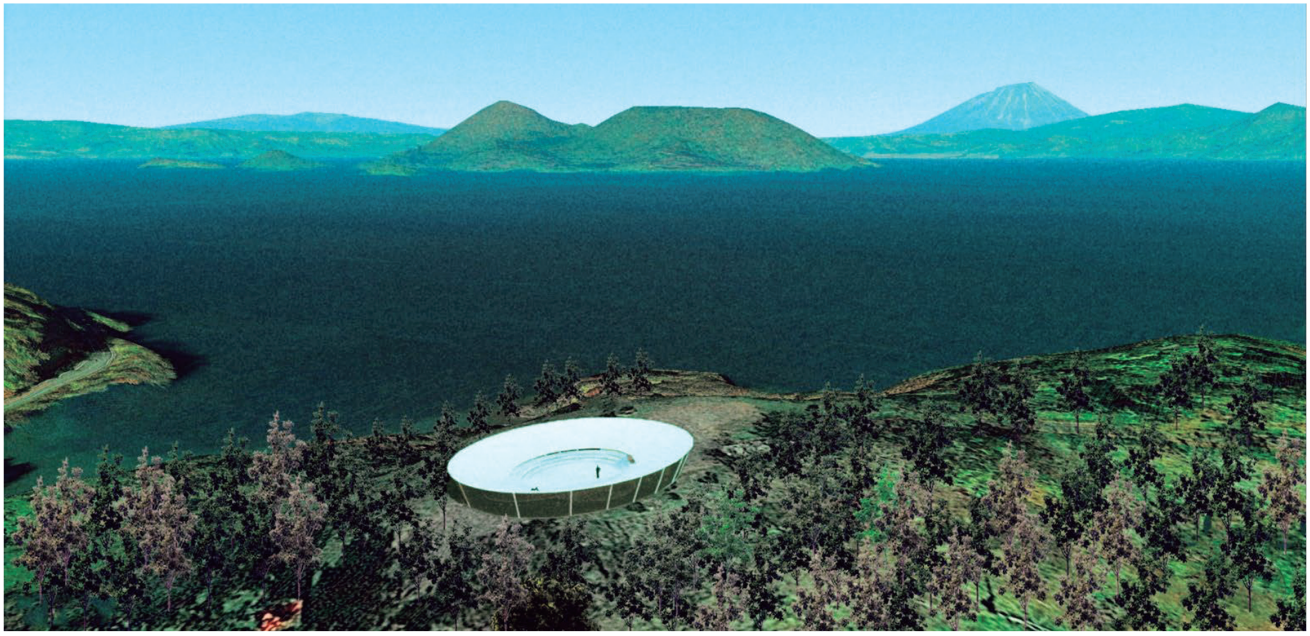
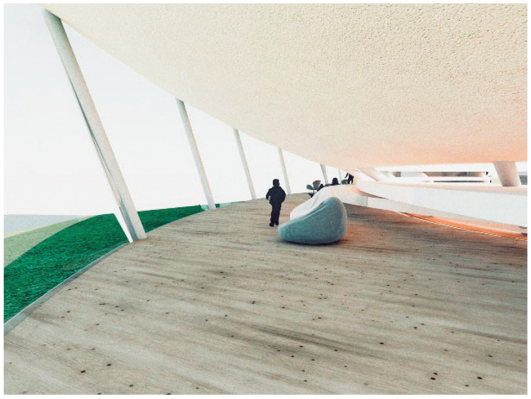
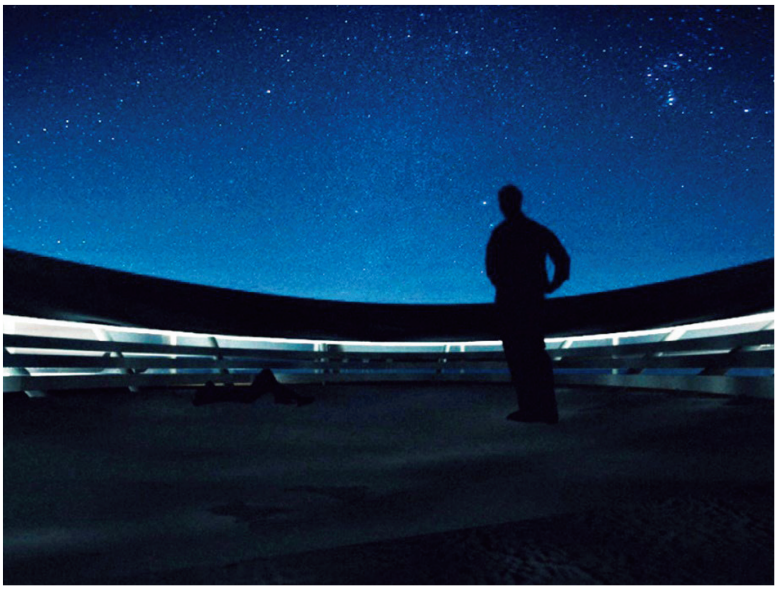
「湖畔に佇む器」

第 48 回北の住まい住宅設計コンペ最優秀賞受賞者
河村健太郎（北海道科学大学 3 年）
小林　温佳（北海道科学大学 3 年）
（共同作品）

この度、第 48 回北の住まい住宅設計コンペにおいて最優秀賞をいただきました。このような賞を受賞でき、大変うれしく思います。この場をお借りして、審査員長の米田先生や審査委員の皆様方、日ごろお世話になっている北海道科学大学の先生方に改めて感謝申し上げます。今回の受賞に際して寄稿文を書く機会をいただいたので、作品が出来上がるまでの私たちの経緯について書きたいと思います。

今回のテーマは、北海道の魅力にひたる「旅行者の家」の設計であり、ひたるが強調されていることに出題者の意図を感じます。そこで、この作品を見た人が、一目で北海道の魅力にひたっていると感じられるような建築を作ることを目標に設計を始めました。

私たちはまず初めに、北海道の魅力が一番に味わえる場所がどこなのかを考えました。北海道には、田畑が広がる田園や山々が連なる連峰、低密度の集落、活火山やカルデラ湖、澄んだ空気、綺麗な星空など、挙げればきりがないほどの魅力があります。私たちは、北海道という土地がこういった特徴を全て持ち合わせているのが最大の魅力ではないかと思い、その出来るだけ多くを堪能したいと考えました。そこで、四方を昭和新山・洞爺湖・羊蹄山・ニセコ連峰・壮瞥町のまちに囲まれた壮瞥公園を敷地に選び、それらを建築が繋ぐようなイメージを念頭に設計を進めました。

選定後には、２人で実際の敷地を見に行きました。道道洞爺湖登別線沿いにある旅館前の T 字路を洞爺湖方面に向かうと、公園への入り口があります。そこから急な坂を 1 km ほど上っていくと、公園の展望台にたどり着きます。そこには穏やかな風が流れていて、山々や湖が私たちを優しく包み込むような空間でした。生活するには多少不便な場所ですが、新たに手を加える必要がないほど居心地の良い場所です。そこで、小さな山の頂上に位置する敷地を、そのまま活用することにしました。その輪郭を縁取るような楕円形の建築を作ることで、四方に続く北海道の魅力を壁で断絶しない大きなワンルーム空間を検討しました。その後、実際の敷地を見て得られた情報と浮かんだ発想を基に話し合いを進めた結果、この楕円に高さを与え湖畔に佇む器のようにすることで、ひたるという感覚に陥るようなデザインを作り出すことを考えました。

外形が決まった後、内部空間についての検討を進めていきました。その時に私たちが意識したことは、高い環境性能を実現しながら人間の身体に応答した建築を作ることでした。北海道に住む私たちは、否応なく厳しい自然環境の中で生活しています。当然ですが、旅行者も全く同じ環境に身を置くわけで、季節を問わず安定した温熱環境が求められます。また、ワンルームであるがゆえに、違和感なく空間を仕切る必要があります。そこで、器の中心をドーナツのように空洞化し、そこへリング状にスリットを設けることで日射制御と自然換気に対応しました。さらに、３枚あるリングをそれぞれ異なる方向へ偏心させることで多様な段差を生み、緩やかに空間を仕切っています。段差の寸法は 300 mm・600 mm・900 mm で、深く腰をかけて横になることもできれば、本を読みながらコーヒーを飲むこともできるし、料理を作って食べることもできます。このように、人間の身体に応答した寸法にすることで、必然的に内部空間が仕切られる空間を目指しました。身体性は外部空間も同様です。３枚のリングは蹴上 300 mm の階段となり、旅行者を包み込む器へと導きます。